球磨村毎床の梨栽培は、大正初期に始まった。その美しい景観から平成二年に行われた第一回熊本県農村景観コンクールで大賞となった。

花びらで彩られた梨の里

集落を埋め尽くす満開の梨の花。桜が散ってしまった頃、毎床にもう一つの春がやって来る。

大正初期、一人の若者が始めた毎床の梨栽培は、今では地区の半分以上、二十数戸が携わっている。石を積み上げて作った梨園が段々に連なる。種類も「二十世紀」や「豊水」などいろいろなら、花の色もクリーム色がかった白、薄い桃色がかった白などいろいろだ。

梨は横に伸びるよう育てられる。大人の背丈より数十㌢高いぐらい。作業をしやすくするためと、風対策だという。四月、それが一斉に花を付ける。斜面をフワフワに覆う花、花、花…。高台から眺める風景は、まるで雲海のようだ。

花が咲く前から作業は忙しい。摘蕾（てきらい）、人口交配、摘果、袋掛け…。七月下旬から始まる出荷は、十月中旬まで続く。

冬の間も施肥、剪定（せんてい）、除草と作業は絶えることがない。梅雨の時期は、病気になりはしないか心配。台風がくれば、実が落ちはしないか心配。

梨の木は寂しがりやなのだ。絶えず人の手を必要とする。ゴツゴツと節くれだった幹からは想像もつかないが。この満開の花は、もしかしたら恩返しのつもりかもしれない。

梨園の間を縫って、細い水路が走る。約二百五十年前、地区の農民が田畑を潤すため造った毎床溝だ。水が春の光を反射してキラキラ輝く。その輝きは、人々の活力あふれる生き方を象徴しているようだ。

ふと『桃源郷』という言葉が頭に浮かんだ。桃の花が咲き乱れる理想郷。梨の花という違いはあるが、それはまさしく目の前に広がるこの毎床のような土地のことなのだろう。